芭蕉百回忌追善「風羅念仏」事業と『新幽蘭集』―曾洛の暁台顕彰活動（二）

寺島　徹

安永・天明期の尾張俳人である加藤暁台（一七三二―一七九二）は芭蕉百回忌取越追善事業である『風羅念仏』法要を行ったことで知られている。『風羅念仏』の関連資料である曾洛編『新幽蘭集』について検討した上で翻刻する。

一　「風羅念仏」事業と暁台

『風羅念仏』事業とは、暁台が行った蕉風復興運動の一つであり、芭蕉百回忌の取越追善を企画したものである。大きくわけて、天明元年（一七八一）から天明二年にかけての関東を中心とした事業と、蕪村の後ろ盾で行った天明三年の上方を中心にした法要からなる。(1)

まず、なぜ蕉風復興運動において「風羅念仏」を標榜したのか、という点を確認する必要があろう。第一義的には、芭蕉の別号である「風羅坊」によるところが大きいだろう。蕉門の惟然が幻住庵で芭蕉と親交を深めたこと、芭蕉没後、風羅念仏を唱道しながら、全国を行脚したことが知られる。『風羅念仏　東武之巻　次篇』の冬映の跋文に「美濃の狂法師か口唱せしをもて題号となす」とあるように、安永期に幻住庵を基盤に活動した暁台が、惟然のこのような行動を念頭に、自らを幻住庵や義仲寺の系譜に位置づける意味で、「風羅念仏」を標榜したことは想像に難くない。安永後期の蕪村・几董ら夜半亭との交流も、湖南幻住庵が大きな舞台となっていたのだ。もちろん、「風羅念仏」がもつ、空也僧の思想への共感という要素も見過ごせないであろう。(2)

このような、安永後期における暁台の上方での布石の一方で、明和期からの関東、東北行脚で築きあげた交流をもとに、関東、東北行脚に赴いていることは、天明期初頭の暁台の動向の特徴でもある。

ここで、あらためて、風羅念仏事業の暁台の動向について、伊藤東吉氏「暁台年譜」の天明元年から天明三年にかけての事蹟や、その後の研究調査や筆者の調査をもとに整理しておきたい（伊藤氏「暁台年譜」のみによって確認されるものは、（伊藤氏）とする）。

安永一〇／天明元（一七八一）　辛丑　五〇歳（暁台）

○辛丑（安永十年）元旦龍門にありて士峯の初日をあおぐ（『暮雨巷句巣』一四七（以下『句巣』））

○春、大津門人たちに、「此わかれ山吹鈍く藤愚也」（『句巣』一六一）の句をよむか（清水孝之氏『加藤暁台―研究・鑑賞・資料』による。以下、（清水氏））。あるいは翌年のことか。

○六月二日、暁台、信長公二百年に尾張総見禅寺に懺法供養の執行されるのをはるかに聴聞して「けふの御法鳴いかづちも艸の露」の吟あり（『夜のはしら』・『暁台句集』（以下『句集』））。

○『句集』に暁台「此日は六月晦日也けるが、我はらからの者独は三十三回、今独は十七年のけふに当りたりければ、月を同じう作善をいとなみ、何くれとものがなしき今宵也けり。」と見える。

○八月朔日、伊勢逸漁のもとを訪れる。暁台・逸漁・南河・楚竹・袋布ら五吟七句。同三日、箕亭（みのてや）において興行。暁台・逸漁・秋江・滄州・楚竹・南河ら六吟表六句。

霧色あり百樹の上に酒吹ん　　暁台
高嶺はやきはつ雁の声　　逸漁
（『句集』、『句巣』一五四、逸漁文庫三・八）

○『句集』に暁台「九月朔日吾初て知命の日なればとて蓬宮へ詣づ」の記事見える。

○九月一日と九月九日の間に関東への長途の旅の出発があったと推測される（清水氏）。

菊の日清見寺に詣で
雪舟が筆の走り歟きくの露（『句巣』一六〇）

○九月十三夜、暁台戸塚の駅にやどりて「月に行は鐘に夜明ん建長寺」の吟あり（桂裏秋興摺物・『句集』参照）。これは、東行中と推測される（伊藤氏）。

○九月晦日に門人彪門と木母寺に遊び梅若の古墳に参詣した。

木母寺の灯に見る秋の行方哉（『句巣』一六三、朝四跋『薦枕』）

○九月十五日頃、「庵崎の松に日ざしや秋の雨」を読むか。

「庵崎は、次の門人彪門と共に木母寺参詣（九月晦日）の句が続くから、駿河のそれでなく、木母寺周辺を指す（『江戸名所図会』）。戸塚から江戸日本橋までは十里十八丁、早立ちをすれば一日行程の圏内にあった。…建長寺は実際に行ったのではないこと、句意に明白であるが、翌日鎌倉へ廻ったとしても、暁台の江戸到着は九月十五日ということになる。」（清水氏）

○十月、朝四が跋を寄せる『薦枕』成る。暁台、桂五、彪門、朱雁らの江戸での同行を伝えるもの。[3]

○十月下旬、蕪村『風羅念仏』のために序す。冬、越藩文学播磨清絢（道立の小父）同じく漢文の序を草す（『新幽蘭集』）。

天明二（一七八二）　壬寅　　五一歳

○暁台隅田川の西岸なる再可子の楼上にて迎春

天明二壬寅武陵迎春としの名残をしまむと再可子が楼上にあそぶ。門々に鈴ふり鳴らし清祓して大路をわたるものあり。

年越えの旅行なりに辻祓　　（『句巣』一六八）

○臥央ら幻住庵に初懐紙興行。

○『初懐紙』（几董編）に暁台発句一を寄せる。

○暁台亡父（岸上林右衛門）三十三回（忌日二月四日）に「めぐり来て髪膚にかゝる春の水」の吟あり（『句集』）。

○二月廿日謝大病臥四十余日にして東武に没す。客中の暁台ともにあり。哀傷の極み桜十句を詠ず（『句集』）。

○三月五日、江戸より可都里に書簡を出す。三月五日付可都里宛書簡に、北鳥に甲斐で勧進させようと思っていたのに足取りがつかめないこと、江戸へ早々に来るよう促すよう要請している。初夏には江戸をたつ旨を述べ、また「すみだ川吟行」の小冊子（おそらく『薦枕』）を送っている（清登典子氏「五味可都里と中興期俳人たちの交渉—三康図書館蔵可都里宛書簡群考」『俳文芸の研究』昭和58年、以下（清登氏））。

○四月四日、門人宰馬の死（三月二十二日）を東武にいる暁台に告げ来る（『句集』）。

○『松露庵随筆』（烏明編）に暁台発句一を寄せる。

○五月序『花鳥篇』（蕪村編）に暁台発句一を寄せる。

○夏五月に名古屋へ帰って老母に考養を尽した（『句巣』一二八）。
○この年、浅草の仮庵を足だまりに東武一円を巡回、夏秋の交には東奥・房総に赴く。唱和する人々に沾峩・蓼太・烏明・白雄・在江戸旧国・宗瑞・梅人・素丸・成美・雪川・蘭台らを数える。また序跋を認めし人々に清秋・孔阜・冬映・丈芝坊・班雀らがあげられる（『風羅念仏』）。
○蕪村が大津の騏道に対して、暁台の在府の様子や、蓼太と、暁台の動向を話していることを告げる（六月九日付騏道宛蕪村書簡）。
○『更級諧歌集二篇』（山海編）に暁台発句一を寄せる。
○八月二十六日、逸漁宛暁台書簡に、東武へ出立する旨を告げ、蕉翁百回之追福集（風羅念仏）への助力を懇願する（石田元季氏『俳文学論考』紹介の暁台書簡参照、現架蔵）。
○八月二十八日、再び東武へ出発する（清水氏）。
けふは我翌日は庵なき露の花（『句巣』一七二）
○九月二十二日付可都里宛書簡に、「上総も片付ケ、此節又々江戸へ罷出申候」とあり「明日は出立、上州より信州へ順回之積」と予定を述べるが実現しなかった模様。甚化への言づても頼む（清登氏）。
○九月、再び白川を越ゆ。「紅葉散髪かれて我にけふもあり」（遺草に拠る、『句集』と異同あり。）（伊藤氏）
○晩秋には奥州街道を那須野の辺まで北上していた（清水氏）。
○十月跋『わすれ花』（几董閲・松花述）に暁台発句一を寄せる。
○初冬、仙台、宮城野へ赴く（『雄淵備忘録』宮城県図書館蔵）。
○天明二年と推測される可都里宛の暁台書簡（十一月十八日付）に北鳥を介して可都里と連絡をとっている様子がうかがえる。「此節帰路にさしかゝり必ず貴境へ経廻可仕、兼々内存に御座候処、一向寒気に苦しめられ、ひとまず帰庵いたし、まやうにより来春出杖可仕哉…をりよく得貴意可申候。」とある（池原錬昌氏『可都里と蟹守』）。
○霜月、越路へ行こうとして雪深き山中に一夜を明すか（『蝉塚集』・『句集』）。（伊藤氏）
○十一月、尾張門弟らが暁台の留守を守る『留守懐紙』（亜満等編）成る。暁台旅中吟入集。蘭水・彪門・松人ら入集。
○「旧冬廿八日帰庵…関東筋手都合宜風羅念仏集も九本出板」の旨を報ず（翌春十一日付最平宛暁台書簡、名古屋市博物館蔵）。
○『風羅念仏』における暁台を僭上なりと難ぜし『梁上君子』の稿成る。同書の大塊舎天年の序に随えば、筆者は天年の師百明か（伊藤氏）。
○十二月二十八日、暁台帰名。

天明三（一七八三）　癸卯　五二歳

○『癸卯初懐紙』（几董撰）に暁台発句一、『はるさめ』（斗墨春帖）に暁台発句一、一月刊『俳諧諸集訂誤』（布蹟編）に暁台発句一を寄せる。
○二月廿五日付の帯梅宛書簡において、暁台は、上方での正式俳諧のために、芭蕉の真蹟二幅を借りだしたい旨願いでる（今栄蔵氏「暁台主催蕉翁百回忌法会と芭蕉真蹟懐紙」『連歌俳諧研究』75号）。
○三月二日、一門を率いて大挙上洛。蕪村もその挙に協力、諸方に案内状を出して、支援している（三月二日付苡堂ら宛蕪村書簡、同三日付百池宛蕪村書簡）。三月十一日、十二日、暁台等と共に湖南幻住庵にて芭蕉百回忌取越追善興行。同十四日から四日間、洛東安養寺端寮にて同追善俳諧興行（十七日まで。三月五、六日付魚官宛蕪村書簡）。同二十日、春坡の招きで蕪村と尾州の諸子饗応を受ける（三月二十一日付春坡宛蕪村書簡）。蕪村・闌更・蝶夢・几董ら列席。同二十三日、四明洞下金福寺芭蕉庵にて蕪村・暁台両派のみで追善俳諧を行う。二月廿三日寺村家の大来堂で句会があり、蕪村は不参

であったが、大坂の半桂と名古屋の羅城が出席している（『風羅念仏法会之巻』等）。

○三月末、南紀の宗祇庵香風、京麸屋町の旅宿に暁台を訪ねる（『東行日記笠やとり』）。初夏の頃帰国する（『東行日記笠やとり』・『句集』）。

○四月廿三日付の大阜・帯梅宛書簡において、「天下之会頭、不思議之名誉、全く風雅之冥加ニ相叶、大悦不過之、生前之面目を表し候。」と風羅念仏の法会について喜びを伝える。三月十五日に帰庵したことを知らせる（前出、今氏稿）。

○仙台の完山、さきの蕉翁法法要に上ったが、初夏の頃しばらく龍門にとどまり、日ならず又行装を告げるのを暁台、暮雨巷に送る（『句集』）。

○五月十一日付、逸漁宛の他郎書簡に、風羅念仏法要の盛況な様を「京師にても今古無之事と大評判」と伝える。また、逸漁に芭蕉追悼発句を寄せるよう要請する（逸漁文庫二・一五）にも法会の盛況の様子を述べる。

○六月、二見形文台をものす。裏書きに「すずりにと拾ふや窪き石の露　風羅坊／天明癸卯　暮雨巷暁台謹写」とあり（早稲田大学、雲英文庫蔵）。

○夏序『葛葉集』（兄守編・筆書頒布）に暁台発句一、夏刊『雪のおきな』（其成編）に暁台発句一を寄せる。

○六月十六日、長く薫陶を受けた也有が没する。（八十二歳）

○秋、暁台は信濃を経て甲斐藤田村に可都里を訪問。望の夜「高根はれて裏行月のひかり哉」の詠あり。帰路は井沢より御坂越にて東海道梅沢に出づ（『峡中之記』・『句集』）。

○十月十六日付逸漁宛の士朗書簡に、『風羅念仏』（法会之巻）への入集料の催促あり。暁台が尾張の暮雨巷を留守にしていること、十月下旬か十一月上旬に帰庵することを告げる（逸漁文庫二・二二）。

○冬序『花の翁』（其成編）に暁台発句一、十一月跋『五車反古』（几董編）に発句五を寄せる。

○十二月廿五日、盟友、蕪村が没する。（六十八歳）

こうしてみると、暁台の東奔西走の様は著しく、風羅念仏事業にかける意気込みと積極的な態度がうかがえる。明和期に築いた雪中庵との交流、また、白雄との交流も大きな出来事である。とくに、この後、天明期には、発句合を合同で行うなど、白雄と暁台の関係は注目すべきものがあろう。[4] さらに、その後の「法会之巻」の盛況ぶりについては、年譜に引用した暁台、蕪村の書簡等によってすでに周知のところである。

風羅念仏にまつわる暁台関係書簡は、多岐にわたり、これまで多くの紹介があるが、未紹介と思われる暮雨巷門弟、他郎による逸漁宛書簡を一部翻刻紹介し、その概況を確認しておこう（綿屋文庫・逸漁文庫俳諧資料集二—四〇）。

…将又今般宗匠遠忌法会執行、木曽寺圓山ともニ正式作者廿人より四五十席縁聴百に余り海内之宗匠出坐各屈腹、京師にても今古無之事と大評判、当年も時節如何と存之外多分之金銭香奠等落掌於社中も大慶いたし候。余り花やかなる事故圓山にても記録いたし、後世へ遺し可申と端之寮にても申候由、扨々師ハ手柄ものニ御座候。法会の次第別紙遣し申候。御披見御尤に候。当日暁叟平臥も仕合、諸事拙子より可申様被申候へ共、例之筆ににくまれものゆへ草卒に申進候（下略）。

伊勢の逸漁一派は、「法会之巻」へは、発句のみの参加であるが（『新幽蘭集』では、暁台から送られた付合をもとに、第三以降一門のみで歌仙を満尾させている）、「京師にても今古無之事と大評判」という他

郎の口吻からも法会が盛大であった模様が伝わってこよう。

二　『風羅念仏』の諸本について

前節の年譜で確認できるように、『風羅念仏』の東武篇は、伝本が多種にわたっている。曾洛の編集した『新幽蘭集』との関係を調べるためにも、その伝本を整理しておきたい。『俳文学大辞典』の風羅念仏の項には、

はじめ東国三三か国を三三巻の追善集に収録する予定で、天明元年秋から翌二年にかけ、江戸を拠点に、関東各地から陸奥・出羽・北陸を巡回、奉財の巻々を募った。しかし、形を成したのは、東武の巻六冊と、上総・下総・安房の巻、みちのくの巻の二冊で、それに天明三年三月（中略）追善の正式俳諧の記録である法会之巻一冊を加え、計九冊らしい。曾洛『新幽蘭集』（文化13）などに残欠がみえる。

とある。『みちのくの巻』は、伊藤東吉氏は原本を見られているようだが、現在の所在は不明である。また、『俳文学大辞典』をはじめ先行研究には、三十三本のうち、計画倒れで九冊（法会之巻を加えて）しか成らなかったとの指摘がみられる。だが、暁台がいう三三巻というのは、自序「東三十三州に走ためにくだりために説三十三本の句巣をあみ」（東武の巻　巻四）と『法会之巻』奥付の「風羅念仏集三十三巻著」の記述をもとにしたものであろう。東武の巻における、脇起こし歌仙の巻の数とすれば、現存七冊で二十八巻、これに現在、所蔵不明の「みちのくの巻」が四～五巻程度歌仙を収めていたとすれば、三十三巻という数字は、おおよそ序文の数字と合うのである。（冊数が三十三なのか、歌仙の巻数を指すのかは、今後のあらたな資料の出現が待たれる）。ともかく年譜に記した天明三年春の最平宛書簡に「関東筋手都合宜風羅念仏集も九本出板」とあるのは、八冊に、その存在が想定される「都の部」か「伊勢の部」を加えた数と符号する。

こころみに、『風羅念仏』の構成を掲げてみよう。関東を中心とした巻の伝本は七冊にわかれる。天理本六冊（わ１７１―５４の１）と藤園堂所蔵本五冊（国文研リーダー番号・ト５―２９―１―Ｄ０１）を中心に整理したい。脇起こし歌仙には、通し番号を付ける。「東武の巻」の書名は、首巻～五巻までは、天理図書館本の外題による。(5)

Ａ「風羅念仏　東武　首巻」半一
清秋序（天明二壬寅春、朝四写）、暁台自序（天明壬寅夏）、①「蓬莱の巻（蓬莱に）」（清秋）、②「うめ柳のまき（かぞへ来ぬ）」（沾峩）、③「しほ鯨の巻（六月や）」巻（曽嵐亭興行）、④「月の巻（名月や）」（百川亭興行）、⑤「ゆふがほの巻」（雨橘）、「四時之吟」（清秋、其川、百川、旨原ら）。刊記、江戸・須原屋市兵衛、京都・辻井吉右衛門（藤園堂本は無刊記）

Ｂ「風羅念仏　東武　次篇　一」半一
百常観孔阜序（天明壬寅春）、⑥「杜鵑の巻（一声の）」（孔阜）、⑦「夜雪のまき（酒飲ば）」（蘭台）、「四時之吟」（孔阜、其盛、蘭台ら）、東武市隠老蚕冬映跋（天明二年壬寅春）。刊記、江戸・須原屋市兵衛、京都・辻井吉右衛門

Ｃ「風羅ねぶつ　東武　二」半一
⑧「ふるいけの巻」（雪中庵連）、烏明・百明ら発句、⑨「潮がしらの巻（名月や）」（二溟亭興行）、⑩「かつをのまき（かまくらを）」（松露庵・土龍庵連）、⑪「しぐれのまき（けふはかり）」（多摩郡大谷連）、多摩郡大谷連・天府発句、四時之吟（不騫、普成、旧国、完来、蓼太、

烏明ら）。刊記、江戸・須原屋市兵衛、京都・辻井吉右衛門

D「風羅ねぶつ　東武　三」半一

⑫「野ざらしの巻」、（白兎園連）、⑬「わか菜のまき（菖蒲に）」（第一園連）、⑭「はなの雲の巻」（洛陀羅閣興行）、⑮「さみだれの巻（日の道や）」（天地菴連）、四時之吟（白兎園連・第一園中・天地菴連）。刊記、江戸・須原屋市兵衛、京都・辻井吉右衛門

E「風羅念ぶつ　東武　四」半一

自序、⑯「故郷の巻（秋十とせ）」（春秋庵連）、⑰「野わきのまき（はせを野分して）」（修行庵連）、⑱「をぎの葉の巻（はせを植て）」（修行庵連）、⑲「はな見の巻（四合器の）」（足立郡連）、四時之吟（湖雀、成美、白雄ら）。刊記、江戸・須原屋市兵衛、京都・辻井吉右衛門

F「風羅念仏　東武　五終」半一

自序（天明壬寅夏）、⑳「小松川の巻（秋に添ふて）」（清談林興行）、㉑「竹醉日の巻（降らずとも）」（文魚）、㉒「田毎のまき（元日に）」（阿梁亭興行）、㉓「かげ清の巻（景清も）」（曾嵐）、㉔「雪の巻（米買に）」（清秋）、四時之吟（雪川、朝四、月成、文魚、曾嵐、彪門ら）。刊記、江戸・須原屋市兵衛、京都・辻井吉右衛門

G「（風羅念仏　上総・下総・安房篇）」（仮題）半一

上総国引田班雀序（天明二壬寅秋）、㉕「海士の家の巻」（下総国曽我野）、㉖「秋風の巻（ものいへば）」（同国純子浦連中）、四時の吟（眉尺、烏朝、兄守ら）、㉗「あられの巻（いかめしき）」（上総国今富）、㉘「山里の巻」（同国引田）、四吟之吟（洗耳、金兔、班雀、沼田亀足ら）。刊記なし。

H『風羅念仏　法会之巻』半一。

暁台編。士朗序（天明三年）

なお、『法会之巻』に関しては、前節の年譜の事項解説参照。[6]

服部徳次郎氏は、前出『稿本 暮雨巷集』において、A・D・Gの順で翻刻している。これは、藤園堂所蔵本によったものであろう。その後、『続暮雨巷集』（さるみの会、昭和39年）において、B・C・E・Fを翻刻しているが、これは、『稿本 暮雨巷集』に収められなかったものを天理本か、洒竹文庫本を用いて補ったものと考えられる。Gの『上総・下総・安房篇』は題簽を欠くが、現在、藤園堂本以外に、他の伝本が見られず孤本の状態にある。[7]

A～Fは、「東武篇」として書肆の辻井吉右衛門を中心に刊行されたものと思われるが、伝本によって、序跋の有無や、脇起こし歌仙が先後する錯綜が多く見られる。[8] もともと、脇起こし歌仙は、半丁六句～八句で、都合二丁半に収まるようになっており、挙句の裏の丁は、すべて白紙である。一冊ごとの体裁としては、脇起こし歌仙プラス当地の四季混雑が基本であるが、歌仙の部分は随時差し替えも想定したつくりになっていたのであろう。

また、歌仙二丁半という、この版面の体裁は、蕉門を強く意識したものでもあった可能性もある。近年、大城悦子氏は、『芭蕉の俳諧構成意識—其角・蕪村との比較を交えて—』（新典社、平成28年）において、蕉門の連句集の体裁について興味深い指摘をされている。芭蕉の『猿蓑』の歌仙が、版本の丁の表に六句、その裏と次丁の表との見開きに十六句、さらに次の見開きに挙句までの十四句を収め、その裏の丁は、句上げのみにするというものである。大城氏は、丁の構成に序・破・急の連句全体の流れを見ようとされている。こういう視点で暁台の俳書をみると、『風羅念仏』「東武篇」の他にも、蕉風復興の書

として知られる『秋の日』（暮雨門編、安永元年）が、この二丁半の形式をとっていることに気づく。『秋の日』は、内容的にも、芭蕉の『冬の日』を強く意識した俳書であることが知られているが、丁の配り方も『冬の日』にきわめて似ているのである。暁台の意識をあらわしたものであろう。『風羅念仏』関連資料の中でも、あとで紹介する曾洛による『新幽蘭集』の歌仙巻は、二丁に窮屈に収める形となっており、『秋の日』や『風羅念仏』東武篇の諸冊と対照的といえる。暁台が芭蕉脇起こし歌仙を企画するにあたり、蕉門のこうした版面構成を意識したとしても不思議ではない。

暮雨巷俳書では、他にも『蕭条篇』（徐英編、安永六年刊）の歌仙もこの形式をとっているが、一方で、弟子達の手になる『弊ぶくろ』（士朗・都貢編、安永三年）はこの形をとっておらず、『留守壊紙』（亜満ら編、天明二年）も完全にこの形式に準じているとは言いがたい。『熱田三歌仙』（暁台編、安永四年）は、一部のみこの形式を用い、忠実とは言えないが、後世の尾張俳壇による『あつた後哥仙』（竹有編、文化十年）は、この形式に忠実である。同時代の他門の俳書も含めて、今後精査が必要であろう。

三　『新幽蘭集』について

前節で確認したように、『風羅念仏』の正当な版本は現在、八冊が知られているわけだが、それを補う版本資料として、『新幽蘭集』があげられる。[9]『新幽蘭集』は、のちに暮雨巷四世を継ぐ照井曽洛が、暁台、臥央、士朗没後の文化十三年頃に、『風羅念仏』の遺漏資料を覆刻したものである。その概要と意義について述べてみよう。

『新幽蘭集』は、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによれば、伝本は天理大学附属天理図書館の綿屋文庫のみである。これまでの先行研究では、綿屋文庫本が使われてきたと思しい。架蔵本、綿屋文庫本を比較調査した限り異同はないため翻刻には架蔵本を用いる。書誌を示しておこう。

〈書誌〉

装幀　半紙本一冊。袋綴。
表紙　丁子色布目紋様。
寸法　縦二三・〇×横一六・二糎。
題簽　中央題簽（「新幽蘭集　一」無辺、縦一五・四糎×横三・二糎）
扉　扉題「暁台先生選俳諧／新幽蘭集全部九冊／尾藩十字盧曾洛著」（見返し）
柱刻　一～三八
丁数　全三十八丁。二十九丁目の丁数表示が後丁三十丁と重複
行数　本文、六～一〇行。
刊記　なし。
編・序跋　暮雨巷曾洛編。「文政十三丙子林鐘／白雀亭／大蘇」（序）「天明辛丑冬十月書下浣蕪村識」（序）「天明紀元之冬／越藩文学播磨清絢」（序）「五道」（序）
印　魁星印　曽洛（扉　朱文方印）大蘇（朱文方印）五道（白文方印）
備考　十七丁目ウ三行目「馴てゐ」修正跡あり。綿屋文庫本は、奥に扉題と同様の袋が付される。

編者の暮雨巷四世、曾洛については、前号の拙稿（「曾洛の暁台顕彰活動（一）」）で俳歴を記したので省略する（その後の調査で、『雪月文事』（竹有、文化四年）、『時雨会』（竹有編、文化六年）にも発句が入集していたことを補記しておく）。

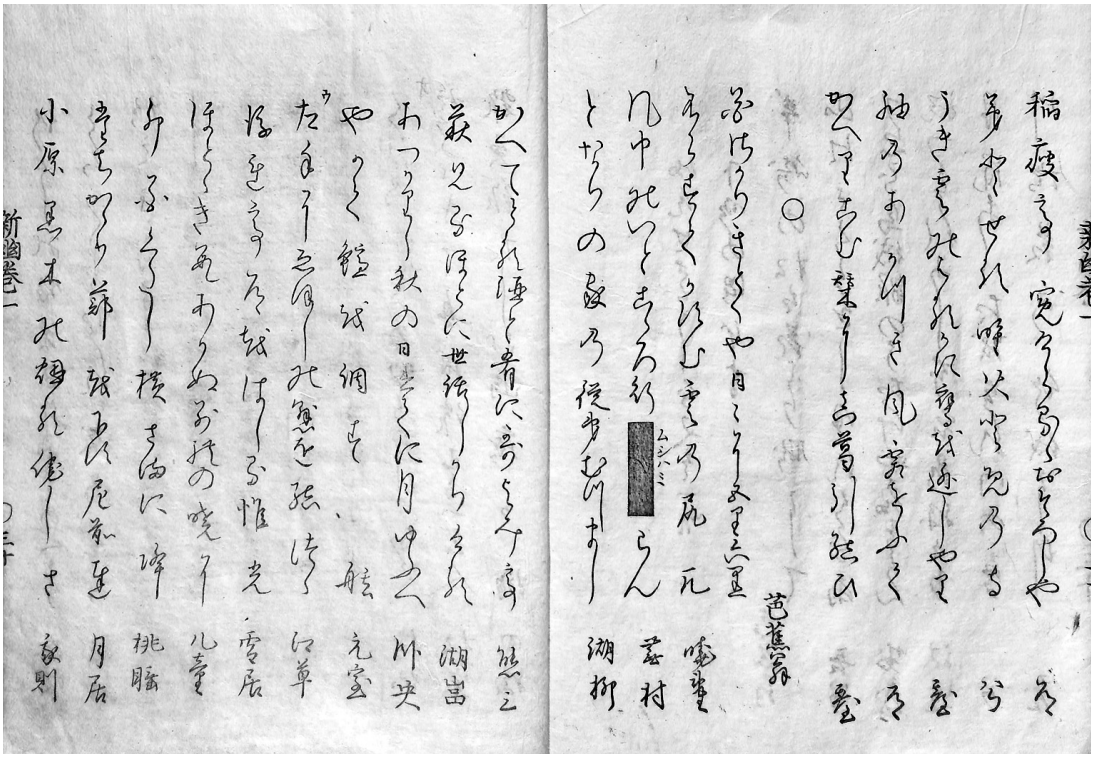

図　『新幽蘭集』（架蔵）

大蘇の序によれば、暁台の遺稿が臥央、士朗と渡り、文化七年頃、士朗が上梓しようとしたらしい。士朗が没したのち、曾洛が出版したというのである。また、五道の序によれば、風羅念仏の国ごとの巻を一つにまとめ、四季別にわけ、企画したものという。その結果、巻一は、まず春をあつめたものとなっている。「序も都の巻にみえたるをのみ物したる」というのは、蕪村と清絢の序を指しており、「都の巻」が企画（出版か）されていた様子も看取される。『新幽蘭集　一』の一巻が、「都の巻」にかなり重なることを示唆しているのかもしれない。扉に「全部九冊」とあるのは、おそらく、前節までにみた『風羅念仏』の「東武篇」、『風羅念仏　法会之巻』等の遺稿を基本にして、曾洛が春夏秋冬の順に組み直して、九冊にしようとしたものではないだろうか。巻二以降が出版されたかどうかは不詳である。

『新幽蘭集　一』の全体の構成としては、五道序、蕪村序、清絢序、大蘇序に続き、主に暁台が脇をつとめる芭蕉の脇起し連句がつづく（連句に通し番号を付し、脇か第三の俳人名のみ記す）。

①「春なれや」半歌仙（銀獅第三）②「うぐひすや」三十三句（歌仙形式、魚渕第三）③「春もやゝ」歌仙（春坡第三）、④「春もやゝ」歌仙（樗楽第三）、⑤「勢ひや」歌仙（北鳥第三）、⑥「猫のこひ」歌仙（大椿第三）、⑦「原中や」歌仙（米翁脇、暁台一座せず）、⑧「陽炎や」歌仙（丈水第三）、⑨「青柳の」歌仙（佳棠第三）、⑩「何の木の」歌仙（南河第三）、⑪「花の雲」歌仙（杜風第三）、⑫「山吹や」歌仙（毛條第三）。つづいて、「満尾せざりし分又は一順下略の混本書」として、⑬「辛崎の」十一句（歌仙形式か、吾兮脇）、⑭「花ざかり」二十四句（蕪村第三）、⑮「花盛」十六句（臥央第三）、⑯「花咲て」十七句（蕪村第三）、⑰「しばらくは」十八句（闌更第三）、⑱「花の陰」十七句（几董第三）、⑲「景清も」二十句（蝶夢第三）、⑳「行春を」二十四句（歌仙形式か、一帋脇）となる。最後に、芭蕉発句と暁

台脇の附合六つが載る。奥付、刊記はない。

全体の傾向として、①～⑫までは（おそらく⑬も）歌仙形式である。「東武篇」がほぼ歌仙形式で、「法会之巻」が百韻形式であったのをみると、前半は、「東武篇」等に準じる形式であり、後半のうち⑭～⑲までは「法会の巻」のような正式俳諧の百韻形式をもとにしているように見える。ただ、前者の連衆は、「東武篇」と異なり、関東、甲斐だけでなく、上方、伊勢など多岐にわたっている。現存するもの以外でも、このような芭蕉脇起こしを企画し行っていた様子がうかがえよう（『都の巻』が中心になっていることも考えられる）。後半は、蕪村、几董、蝶夢、闌更など、『法会の巻』に関わるものが主体となっている。

全体に版本『風羅念仏　法会之巻』と大きな異同がみられ、編集の過程の問題や材料にした遺墨や写しの質の低さも気になる。たとえば、三十二丁裏の「狐なくなる野路（ママ）のしの原」の、「野路」は、版本では「露」となっている。秋が三句続かなくてはならないところなので、「露」でなくてはならない。曾洛の編集の杜撰な一面があることを示唆していよう。俳人名も単純な誤りが、ま見られる。

しかし、版本への推敲の跡や、暁台連句の散佚資料を残すという面では、価値のある点も少なくない。本書の後半部分の句形の異同に注目してみよう。「満尾せざりし分又は一順下略の混本書」（29丁表）以下の連句（百韻の満尾しないもの）は、『法会の巻』とかなり重なっているが、『新幽蘭集』には、別案というべき大きな異同のあるものも少なくない。

たとえば、三月二十三日の金福寺芭蕉庵興行における暁台脇、蕪村第三の⑭「花ざかり」巻の脇起し連句（29丁ウ）では大きな違いがみえる。蕪村の第三からあげてみよう。

『法会之巻』「はなざかり」巻		『新幽蘭集』⑭「花盛」巻	
（第三） 鳳巾の糸心得迄のはすらん	蕪村	凡巾のいとこゝろ行 ■（ムジハミ）らん	蕪村
鄰の家の徒弟むつまし	湖柳	となりの家の従弟むつまし	湖柳
（中略）		（中略）	
（初ウ3） ほとゝきすなけの情の暁や	几董	ほとゝきすあかぬ別れの暁に	几董
雲たのめなる花罌粟の雨	桃睡	卯花くたし横さまに降	桃睡
しのふ間を優婆夷のもとに身をよせて	月居	たちかゝり蔀を下す尼前達	月居
小原黒木の煙わひしら	我則	小原黒木の烟る侘しさ	我則
行年の餅米五升塩松魚	春坡	行としの餅米五升とゝのへて	春坡
とろ〳〵と鳴城の九ツ	維駒	とろ〳〵となる城の九ツ	維駒
杉高き月に鴉の飛わたり	臥央	杉高き月に鴉の飛わたり	道立
露霜あるゝ刀禰の川岸	計之	しら露そほつ淀川の岸	計之

表の六句目から大きく異形句となり、初裏の四句目から十句目までは、字句の改案はもとより、ほぼ別案といってよいほど大きな違いの句もある。作者の変更もあわせて暁台側の原案を残しているといってよいだろう。このような大きな違いは、佳棠・完山ら一座の⑮「花盛」、暁台・几董一座の⑱「花の陰」等の連句でも見られる。暁台側の資料として『新幽蘭集』が暁台の遺稿の形を伝えている可能性が高く、版本への推敲という面でも今後の研究に資する面が少なくないだろう。本稿で全文を翻刻する所以である。

なお、蕪村と暁台が『法会の巻』で一座する正式俳諧、「花咲て」の巻（『新幽蘭集』⑱）には、『蕪村全集　二　連句』により、句稿が二つあることが紹介されている。一つめの（句稿１）は、蕪村のメモ書として記されたもの（『芭蕉・蕪村　芭蕉・蕪村展図録』収録　勉誠社　昭和51年）とのことで、もう一点（句稿２）は、松村景文の識語のあるものである。（句稿１）（句稿２）は、『全集』の解説により、

9個所異同があることが指摘されているが、『新幽蘭集』とはより大きな異同がある。さらに、『山本美術店書画目録 第二号』（平成17年1月発行）には、同種の蕪村側の句稿二種（句幅）が紹介されている（山本聡氏のご教示による）。一巡を示したもの（「句稿一・山」とする）と、断簡（「句稿二・山」とする）である。ここでは、『法会之巻』、『新幽蘭集』所収⑱巻、（句稿1）、（句稿2）、（句稿一・山）、（句稿二・山）のもっとも大きな異同個所を比較してみよう。

A

しなひよき小笹かもとの雫して　——　（句稿1）
しなひよき小笹かもとの雫して　——　（句稿2）
しなひよき小笹かもとの雫して　志好　（句稿一・山）
——　——　（句稿二・山）
しなひあふ小笹かもとの雫して　志好　『新幽蘭集』
しなひあふ小笹かもとの雫して　志好　『法会之巻』

B

らうそくの用意かしこき僕倶して　——　（句稿1）
らうそくの用意かしこき僕倶して　——　（句稿2）
らうそくの用意かしこき僕倶して　東窓　（句稿一・山）
らうそくの用意かしこき僕倶して　——　（句稿二・山）
蝋燭の用意かしこき僕倶して　菅鳥　『新幽蘭集』
とほしする用意かしこき僕倶して　菅鳥　『法会之巻』

C

秋風に墨のたもとの綻ひし　——　（句稿1）
秋風に墨のたもとの綻ひし　——　（句稿2）
秋風に墨のたもとの綻ひし　舞閣　（句稿一・山）
——　舞閣　『新幽蘭集』
秋の風墨の袂の綻ひし　舞閣　『法会之巻』

異同をみると、『新幽蘭集』は、版本『風羅念仏　法会之巻』と蕪村側の句稿とそれぞれ重なる部分がある。AとCの改案・表記および、Bの俳人名の変更の過程をみれば、もともとあった句案から、暁台側の書留をもとに最終的に版本をなしたことが理解できる。『法会之巻』は、暁台側の推敲の意図が強く働いたものと考えてよいだろう。

また、『新幽蘭集』の最後に付された芭蕉発句と暁台脇の付合六つについても言及しておきたい。五道、大蘇ら序文をみても、こういした付合のセットが遺墨として曾洛のもとに伝えられていたと思われる。このような染筆された付合のセットが、風羅念仏の事業に際して、あらかじめ暁台によって用意されていたことを示しているだろう。この付合には、『風羅念仏』東武篇、『風羅念仏　法会之巻』と重なるものが幾つもみられる。

山里は万歳おそし梅の花　芭蕉翁
薮に門見る雪のむら消　暁台

たとえば、この付合セットは、『風羅念仏　上総・下総篇』と同じものであり、『新幽蘭集』前半の中でも、⑪「花の雲」巻の付合は、『風羅念仏　東武　巻三』でも違う連衆で使われている。後半の⑲「景清も」巻（「法会之巻」にもあり）の付合も、『同東武　巻五』でも、別の連衆で使われている。つまり、「風羅念仏」事業のおりに、こうした脇起こしの付合セットで染筆されたものが用意されていて、方々の俳壇へ持ち寄り興行するか、送り渡した上で、奉財の連句を満尾させていった様子が推測できるのである。[10]

※翻刻にあたり、句の清濁については原典を尊重する。序・前書においては、句読点を適宜補った。仮名遣いは原典のままとし、旧字体は新字体に改め、異体字は基本的に現行の字体に改めた。丁移りは｜で示し、丁数は（　）であらわす。『法会之巻』により明らかに誤謬が訂正できる語句・俳人名は、右脇に（　）で示す。翻刻本文には、現在では不適切な表現もみられるが、近世当時の表現意識を尊重し、原典の通りとした。

なお、蕪村の序文と、清絢の真名序は、それぞれ『蕪村全集　俳詩・俳文』（講談社、平成六年）、『同　九　年譜・資料』（平成二十一年）に翻刻されているため、本稿では割愛する。

四　翻刻『新幽蘭集』

暁台先生選俳詣	
新幽蘭集	全部九冊
尾藩　十字廬曾洛著（朱印）	

（扉題）

暁先生の頭它(陀)袋の底にもとおもへるもの也。こハ暁台先生の魂箴まき〳〵ながら拾へバ捨る」（1オ）習にて久しく埋れけるが、臥央宗匠素地のよきハとて譲れつるを琵琶園先生梓にちりばめよとて一筆の序」（1ウ）ありき。それさへ早六年過、曽洛子つとめて是が為に力を尽も、其魂不生不滅に三界を流転してこゝに」（2オ）ひろハるゝものか。是こそ新幽蘭集なれと序を補事しかり。

文化十三丙子林鐘　白雀亭　大蘇（大蘇「印」）（2ウ）

（「天明辛丑冬十月書下浣蕪村識」（序）略）

（「天明紀元之冬／越藩文学　播磨清絢」（序）略）

こは風羅集の国〴〵の巻をひとつに物して、四つのときに随ひて、ついでをもたぐひをもえりたゞして、かの集にもれたるもつたへ、たゞしきハことゞ〳〵く拾ひ集めて、次〳〵の巻にまきなしてかく物したるハ十字廬ぬしのまめ心になんありける。しかはあれど、深きゆゑよしなンどのある句どもゝ殊さらにあげつらはず、序も都の巻にみえたるをのミ物したるなンどすべてことしげきをいとはれたるなり。なほかたるたぐひの家〳〵にひめおかれたる巻〳〵もあらば、かのぬしにはかりておひつぎにくはへ給ひねかし　五道（白文印）」（5ウ）

春なれや名もなき山も朝霞　芭蕉翁
雉子啼うつる遠里の隈　暁台
琵琶打の埃たつ窓の糸遊に　銀獅
提倒るゝ板しきの上　、
晨明に白き小萩も切受て　台
はかまのくゝり解てちる露　、
浅川に鵤のわたる影ミゆる　獅
銭落せしとわめく気違　、」（6オ）
あやなくも砂に文字書はかなさは　台
蟻にすさみのよしも有けり　、
僧形の町に住居のいと憎し　獅
頭巾に湿る真夜中の月　、
田上の網代にかゝる山颪　台
人喰犬の矢を負て行　、

道端に木綿の重荷鞍かへり　獅
昼の鼓の遠く聞ゆる　、
花盛夢庵の記をやつゝるらむ　台
鼠走てすゝめ巣に啼　、」（6ウ）

うくひすや餅に糞する椽の先　芭蕉翁
影のんとりとなりし日の昼　暁台
浦人の髻（モトヒ）に柳ゆひそへて　魚渕
へ習ひそむる麻の機糸　奇峯
月の弓空すほらしく晴ちきり　金英
露草なひく秋のすゝしさ　竹雨」（7オ）
蟷螂のほむらに連歌さめぬらん　亭々
酒乃ゆふへの夢復しけり　玉把
乗合す雨の艤のつれ〳〵に　古扇
花をるミちる樗遙けし　此君
宮守かしろき腮をすりよせて　兄守
わかれをつくる恋の野狐　渕
吹すさむ暁の風月暗く　峯
菊もすかれし門の敷砂　英
きり〳〵すいつか音もなく成果し　雨
旅する鰥夫子ひとりに泣　亭」（7ウ）
暮またき花の霞をうち払ひ　把
松色ためてとんとほこらす　扇
痒（カユカサ）もはるのこゝろに忘れつゝ　君
窰（ホヽハ）りし文またひろけ見る　守
立粧ふ鏡にねたみ顕れし　渕
水玉岩せく熊さゝの陰　峯

嚔（ウサキハナ）かゝらぬまてをたのしミて　英
尼と酒のむ庵の雪の日　雨
寒梅に燈のはしり匂ひ跡　亭
眼かねちらつく縫はくの鬱　把」（8オ）
風細く比良の白雲立はなれ　扇
馬とりはなつ月のさふらひ　君
秋の色道しるへ申里翁　守
芭に露けき信夫掘入　渕
思ひそむ湊の深ミわすられす　峯
鶚鮨得に小舟うかへし　英
仮股の石見つけたる夕間暮　雨」（8ウ）

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉翁
気霽て夜のさまのとかなり　暁台
爐の名残都に旅のあるしして　春坡
雲井に走る魚試ん　、
すゝしくも旭ののほる草の雨　几董
乞児か窓によきわらち売　、」（9オ）
栃原の討剥かたる鉦の声　台
氷のひかり膽にしむ夜そ　、
有かたき告を象る宇佐の神　坡
海に拾へる百俵の米　、
真白なる鳥ひら〳〵と群わたり　董
離宮を守護す晨明の月　、
露のなさけ我を岩木と笑らむ　台
文なかれゆく萩の下水　、
垣こしにものを咎る犬吼て　坡

張なき弓を持て狂へる
落花ふむ袴の裾の白妙に
山路の御遊春斜なり
水うらゝ亀も音をなく此ころや
僧目のくらむ読経百巻
大鍋に汁烹かへる台ところ
座頭鯨を突はしめたり
つか〳〵と小春の日かけ傾きて
和睦の使者の敲く城門
優にして岐蘇の岩波賦にけり
御坂のさくらもみちするかな
月の出におくれて六の鐘か鳴
夕霧を吊ふ亡八屋の秋
優婆塞に冶郎の昔しのはるゝ
物よく喰ふておもき煩ひ
報ふ事しりて狐のあはれなり
暁暗き竹堂の雨
ころ〳〵とねたり投壺を打さして
いかに酒なきこの花の日に
舟よせて山吹の墻踏越さん
扇吹来す一片の東風

春もやゝけしきとゝのふ月と梅
風さへ夜のさまのとか也
灰たわら芋植里に転すらん
身の長によき杖求めたる
訪れぬと誰かしるしせし留守の戸に

、」（9ウ）
董　、　台　、　坡　、　董　、　台　、」（10オ）
坡　、　、　、　台　、　坡　、　董　、」（10ウ）

芭蕉翁
暁台
樗楽
去荊
南嶺

戯れて浪をたつる池の鵝
けふはかり酒戒むる事なかれ
妙義へかゝる雨乞の雲
呼りあふ蛭の口處を掻なから
長者の子ても死ねハ塊
土器のとほし火しめる松の風
残夢を語るきぬ〳〵の月
露の情たけき心もミたれ口
霧の干潟に舟はなち置
先へたつ曹洞坊主寒からむ
はつ鶯もきかぬふりにて
花いまたそこらに乾菜懸わたし
鯡をきさむ鍬に陽炎
太鼓はる家は一軒惣瓦
目をおとろかす長安の市
急に身の片つく思案出さりけり
又乳を捨る青艸の上
日盛の風さゝやかに一里山
いさばの重荷作り直しつ
三井寺の鐘聞はつす折もあり
さつさ雪ふり千鳥立さわく
名香の薫るハあやし賤かもとに
具足を脱てすて所なき
月すゝし胸を潤す瓜の味
まくらのあたり蚊の無くもかな
こしかたの出羽なつかしき恋の山
けふも北から吹はるゝ雨

打羊」（11オ）
洞里
雲浦
南簾
甘戎
阿爵
文祥
都良
子俊
台　楽」（11ウ）
荊　嶺　羊　里　浦　簾　戒　爵　祥　良」（12オ）
俊　台　楽　荊　嶺　羊

菅蓆織てしまへハ昼になり　里
餅かするころ春もさひしき　浦
華によるこゝろむかしの俤よ　籬
朧〳〵とゆきめくる水　戒」（12ウ）

勢ひや氷柱きえてハ瀧津魚　芭蕉翁
風ひとつ葉を光る春陽　暁台
箒とるつふねとならん梅か香に　北鳥
我宿出て夜は二夜なり　台
月さひぬ土まくれたる壁の骨　、
したゝか渋をたらす大瓶　鳥」（13オ）
秋の色浮世法師を白眼やり　、
松おもむろに江に闇く暮　台
うち捨し小雨の簑のぬしハ誰　、
しのひ車をよせるをりふし　鳥
まかけさす鼬の声のあなにくや　、
今朝はひら〳〵茶山花のちり　台
遠山の雪気に月はかきくれて　、
みたれし軍駈やふりゆく　鳥
世にしれぬ楽の一軸懐に　、
飛鳥に家は住かはるとも　台」（13ウ）
雨かほる花の高円の雪とけて　、
小坂小道のはるそしつけき　鳥
在番の気を放たるとまり狩　、
こゝろしりなる遊女なりけり　台
うき事は笑ふ中にも積るへし　、
朝熊時雨るゝ昴（スハル）真時　鳥

寒菊のやゝ二葉三葉赤き比　、
連歌はしむる君かことふき　台
からひたる味よ岩城の塩肴　、
御林つゝき月の朝風　鳥」（14オ）
おく露にからかね仏の錆を磨　、
盗人とめて飯たかす秋　台
楽天の一句をしりてつふやけハ　、
行ちかふ馬ひきもとしけり　鳥
蓬生の丈にあまりてむせ暑し　、
ま見えて法のまとひうたるゝ　台
国遠き因の人に立そひて　、
一のミなとゝ諷ふへかりき　鳥
大盃夜明し處花に鳥　、
雲はみとりに霞うつれり　台」（14ウ）

猫のこひやむとき閨の朧月　芭蕉翁
紅梅すかす夜半の紛に　暁台
誰笛そほのかに東風の聞す覧　大椿
江に酒のめは魚舟に入る　金洞
てら〳〵と夕暾雲の顔にさし　薪路
瓦の土をこねる古鍬　執筆」（15オ）
西東六条わかるこのころや　台
越後の長者子のなきを歎　椿
諺のまことをたのむ陰の痕　洞
つほみ持たる柑子うゑけり　路
草分の下り井かたとる岡のへに　椿
今はあとなき恋にくつをれ　台

目さめては枕に狂ふ夜の月　路
四足門をたゝくあきかせ　洞
血をぬりし刃広の刀冷しき　台
北へわかるゝ乱雁を賦す　椿」（15ウ）
浪高う花ある嶋に舟かけて　洞
生海鼠蕩（クサレ）し昼のあたゝか　路
憎からし揚屋男の黒あふら　椿
うしろ暗さに愛宕恐れる　台
時〳〵に窓うつ風の鳴行て　路
いまはの薬小判煎る　洞
空蝉の歌書留る此夕　台
はな撫子や岩の陰道　椿
庭神楽靫ゆるされし日の匂ひ　洞
永壱貫そたふとかりける　路」（16オ）
鎌倉や肥たる犬の人吼て　椿
鼓楼あたりの月をしくるゝ　台
寄生の落葉は先に散果ぬ　路
ひきわり麦をもらふ山住　洞
物ありと見んも恥し鑓袋　台
世たゝ蚯蚓の尾頭もなし　椿
乱たる国に掟の事多き　洞
ねられぬ宿を一夜かりつゝ　路
散時は川瀬にかゝる花の音　椿
うこかぬ雲をかすみこめたり　筆」（16ウ）

翁

原中や物にもつかす鳴雲雀　米翁
笠に日をつむ草の陽炎　さくら咲木下に仮の家建て　帋秋
小雨しつかに暮沈むなり　知竜
江の西に片われ月のきら〳〵と　渭天
遠のきぬたに鎧身にしむ　嵐夕」（17オ）
万葉の情思ひやるあきの風　秋
つくらぬ菊のいろそ栄ある　夕
鶴はたつ馴てゐ眠る岡の松　天
雲いつなかく日の残る空　竜
玉抱て焦るゝ胸やさますらむ　夕
ひとりとけたる髪の乱に　翁
是までの盗をくゆる涙かな　秋
槙の戸さゝて月を見る須磨　竜
夜を深く笛吹歩行く祝子が　天
人まし〳〵とにらむ白鹿　夕」（17ウ）
花に佩くかハらけ旅に短て　翁
火ふりつ春の川わたるみゆ　秋
八重かすみ夢窻の眉を拝とて　竜
京わらんへの口のさかなき　天
つく〳〵と思へは酒は仇なりや　夕
琵琶弾捨て唯まろけゐる　翁
夕貝のかよわき花に風みえて　秋
何に染るや妹か手しほり　竜
小さひしき柴の下の火の明り　天
冬菜の中に吉田岡崎　夕」（18オ）
たひら雪ひたり〳〵と降かゝり　翁
舎人ひき出す連錦の駒　秋
稲妻に月はかくれて夜そ凄　龍

懸穂なかるゝ一面の水　天
鳥わたる片岨村の薄紅葉　夕
しきりに酌て瓶たゝくなり　翁
此橋をけふ踏来るは誰ならめ　秋
念仏の音頭暮雨巷の主　龍
百年に近よる花の盛にて　天
柳かそらも匂ひぬる春　夕」（18ウ）

陽炎や柴胡の糸の薄くもり　芭蕉翁
人見る方に春深きこゑ　暁台
着衣はしめ屏風一重の囲して　丈水
さし出す茶に宇治薫る也　呉楼
治れる御代にも捨ぬ月の弓　志柳
笠破られて案山子とゝのふ　芦尺」（19オ）
悟るほと〳〵たゝうそ寒き　百舟
あかつきちかく飯の貝ふく　為徳
逃延て駒建直すものゝかけ　黄茅
小雪を横に送る松風　東水
山深みつら〳〵越の家造り　風江
ふるき道具の似合ふ明暮　斗紅
世の業を頭陀に替たる旅の月　魚光
紅葉散しく行幸の跡　凌車
里遠き社に秋の弥寂て　祇登
網引のこゑの響く山彦　祇中」（19ウ）
きのふけふの花聟殿も丸裸　雨笛
雛の遊ひにさけも有けり　吾青
養父入の故郷あらハに文の端　東阿

百香を追ふて辻駕のゆく　呑溟
暮るほといふせくきこゆ鐘の声　魚仙
湖水吹込家のすゝしき　湘水
人丸も李白か顔も見ゆる也　去雲
旅の命のかゝる小袋　里暁
念仏も御経もことに霜枯る　斧仙
松のしけミに夕煙たつ　樗風」（20オ）
気を付て荷物片よる月の宿　起由
みなと〳〵に秋の入舟　蔵六
朝起の微塵つもりて栗叺　青湖
異見の堅き親の風流　其暁
傾城に虚実自在の有ならん　鶏群
櫛も簪もたゝあられ酒　蝉呼
我侭に年経る岨の梢にて　許良
小柴の窓のとめる花鳥　岸鷺
石碑に蝶糸遊のつとひぬる　潜魚
風も光れり水も光れり　至恵」（20ウ）

青柳の泥にしたるゝ汐干哉　芭蕉翁
雨帯ふ鳶の蜊割声　暁台
戸に倚てつら〳〵春や惜らん　佳棠
鍔になるへき古泉憐ミ　、
長安の道やゝひらく国の月　台
穂黒の晩稲霜に打臥　、」（21オ）
秋ためて牛の病の流行なり　棠
家売かけし甥をしかりに　台
双六の手練につゝく人もなし　棠

たゝ仮初の御遊かさなり　台
花樗かけは百歩に餘るらむ　棠
隠岐の海賊きつて梟たり　台
屠るへき籠の羊の月になく　棠
露ひえそむる宿は浅茅の　台
身の秋よあはれ昔は男山　、
恋に死さる命くちをし　棠」（21ウ）
水に散花しつかなるあかつきに　、
三杵の精米蓬折そへ　台
御文庫の万葉を解く春の風　、
琴のいとよる業をしそ見る　棠
昼鐘のとこともなしにうち曇り　台
十囲の椙の多き山間　棠
あかゝりを今は泣なる罰あたり　台
人におくれて塩はこふなり　棠
柵厚き高坂殿の捨篝　台
撫子原に夏の夜の雨　棠」（22オ）
なけふしの声美しうひなひつゝ　台
あとなし事に身をも打なん　棠
有明に守り解たる宿直口　台
うこくと見えてひらく蕣　棠
露さひし馬の歯を摺飼葉桶　、
秀句をかたる更科の祖父　台
財多き越後の僧の温泉戻りに　、
唐木つくりの戒刀の鞘　棠
淡しくも酒色をなす花の陰　台
蟻か出初て螻もうこめく　棠」（22ウ）

何の木の花とはしらす匂ひかな　芭蕉翁
春日すゝしくさし出る也　暁台
海雲とり鴎の馴てうち交り　南河
浦の訴詔の十年もなき　幾望
此月も傾きのみえぬ三日の月　逸漁
ほのかに菊の薫る淑景舎　宇水」（23オ）
謎かけて扇捨たる椽のはし　秋江
難波哥婚の恋のすはやき　滄洲
うき草のうかれて歩行旅の空　楚竹
獅子の手毎を吹かへす笛　河
格別に夜冴おほえる寒替り　望
身よりといふもミな末になる　漁
故郷に居合す盆の墓詣り　水
焚火に煙るくれかたの月　江
秋の日の沖は雨もつ風の色　渕
樞機てはやき佐渡の出切手　竹」（23ウ）
来る春に親の跡つく徒奉公　河
ひらき牛房を祝ふ膳さき　望
軒ちかく鶯の啼朝のうち　漁
それなりけりにのひる法躰　水
煩悩の五十そこらハまたやます　江
めつきりかはる京の冬かれ　洲
うす雪に日のさす宮の破風作り　竹
鷹の羽かけにさわくむら鳥　河
早雲の病者見舞も方便にて　望
ものよむまてに育つみなし子　漁」（24オ）

たくり蠅古き石井の隻釣瓶　水
山を下れは浜の砂みち　江
鵁鶄（アヲサギ）の寝姿侘し月の入　洲
秋の風情や門たゝく僧　竹
露しもに喰兀したる根来椀　河
いつともなしにかし減らす金　洲
歴々に膝をならへる稽古弓　漁
遊ひも足らす正月のたつ　水
春雨の花より前に降こして　望
圏屋の牛の長閑なる声　竹」（24ウ）

花の雲鐘は上野か浅草か　芭蕉翁
うつゝともなく陽炎を踏　暁台
はるを売能狂言の醉さめて　杜風
入日のめくるはつ〳〵の垣　元室
翼なす月は片々と羽化すらん　文痴
峯蓬莱の秋を亜くみゆ　百水」（25オ）
しはしとて浅茅か露に榻を置　台
鉄気油に世を工む家　風
さかしくも七つの娘機を織　室
水仙哲て恋の捨くさ　痴
腰懸のうき名は鰒のあつものに　水
とほし火いそく堂嶋の岸　台
とろ〳〵と太鼓は月のほとゝきす　風
篠ふく風の身に暑きかな　室
山姥か古き平家をうなりけり　痴
哥にもつくしかたきこの里　水」（25ウ）

梅柳串蜊干ころなれや　台
うくひすを駆坊官の児　風
しのはしく小雨降つゝ日長くて　室
木賃の宿は橋立の海士　痴
文遠き妹に文殊の智恵を借　水
解てはかなき夢を煩ふ　台
たちはなのかに善悪をいはんすへ　風
京に生れて木曽に牛追ふ　室
苦納（ニガ）言茶のうたかたをあまたらす　痴
千里つらぬく口外の風　水」（26オ）
放参に霜踏分し沓のあと　台
招の烏母をたつねむ　風
はなれ町水を事かく宵月に　室
濁漏を盛るさゝれさかつき　痴
葛布の價に玉をつかハして　水
いまさら名残せむも苦しき　台
瀧津落てねきらふ神の耳なきや　風
つくしはしろく咲みたれけり　室
何くれと鐘をおたまく花の雲　痴
いらこの鷹に経緒のいとゆふ　水」

山吹や宇治の焙烙のにほふ時　芭蕉翁
人あらわるゝ春の雨はれ　暁台
勝鶏の声すら〳〵と陽炎に　毛條
先誉るなりさかつきの形　、
もち汐の椽の下迄月のさし　台
夜をうかされてあるく蜻蛉　、」（27オ）

狼の鹿とりくらふ露ふかみ　條
横川の堂に大師おはする　、
白衣に従ふ者も泣しほれ　台
世の偽にこゝろちり〳〵　、
舟の上十里はかりと聞えける　條
夜あけて見れハ若き山伏　、
晨明に豊後さかり端涼して　台
軒に蝉なく草葺の家　條
毒病ミのためし薬をひろむ也　、
とかくしたしむ鳥羽の道楽　台」（27ウ）
袖せまきあんにやの躍花に見ん　、
神鳴そむる南はるかに　條
かくし田の水口祭る小昼前　台
九十かしらに家は三夫婦　、
洗足のたらひを雨にうたせおき　條
にくき鼬の子を運ふ躰　、
蓮の花くつるゝ時をなかめにて　台
なさけもしれる木曽の兵　、
黒髪も今はをしまて浅ましき　條
半蔀おもき風のたそかれ　、」（28オ）
松虫のうらふれ声に月や恋ふ　台
宗長を追ふ露のあら簑　、
酴醾漉の苦ミ忘れて静なる　條
ふたゝひのそく神の直木　、
暮しはしあれたる駒を芝繋　台
巣鴨あたりの人ひなひたり　、
鐘曳にうち交り行座頭の坊　條

はや半なる花の三月　、
長閑さに枕屏風をおしのけて　台
蛇にそへし篭のさわらひ　筆」（28ウ）

満尾せさりし分又は一順
下略の混本書

辛崎の松は花より朧にて　芭蕉翁
山はさくらをしほるはる雨　吾兮
すゑる烏賊雛のうたけやさますらん　暁台
脱わすれにし布衣尋ねけり　騏道
月嵐あしたを告る門の声　兮
川端薮の竹伐に行　台」（29オ）
稲痩て寃けらるゝおそろしや　道
弟登せる野火とめの寺　兮
うき雲のはるかに鷹を逃しやり　台
袖のあかつき風霜をふく　道
かへりこむ栞に真葛引結ひ　台

○

花さかりきとくや日々に五里六里　芭蕉翁
ふらすてかすむ雲の尻兀　暁台
几巾のいとこゝろ行■（ムシハミ）らん　蕪村
となりの家の従弟むつまし　湖柳（29ウ）
かへてとる酒と肴に哥よみて　熊三
萩見るほどに世話しかりける　湖嵐
あつかりし秋の日すてに月ゆふへ　臥央
やかて鱸を調す舷　元室
左手（ウ）にゑほしの懸を結つゝ　江草

後れて道をはしる惟光　雪居
ほとゝきすあかぬ別れの暁に　几董
卯花くたし横さまに降　桃睡
たちかゝり蔀を下す尼前達　月居
小原黒木の烟る侘しさ　我則」（30オ）
行としの餅米五升とゝのへて　春坡
とろ〳〵となる城の九ツ　維駒
杉高き月に鴉の飛わたり　道立
しら露そほつ淀川の岸　計之
ちくはくに綴ころもやうちぬらん　翠関
能武者一騎門に彳　是岩
黒眉に梨散まふる夕あらし　佛仙
はるの小鳥のから声になく　橘仙
オ
爐ふさきて舟を催す二三人　松宗
雑魚鮓たしむ幽庵か棚　田福」（30ウ）

花盛山は日ころの朝ほらけ　芭蕉翁
かすみを袖にしはし栖す　暁台
なつかしき友人遠く春過て　臥央
風待舟の又こゝによる　完山
オホカニ
螯を焙りかねたる細き火に　佳棠
ムカハキ
行騰を佩庭の露けさ　之兮
おしわけて榻を居ぬる秋の月　洞里
声啼かはす籠のすゝむし　維駒」（31オ）
能衣に硯の墨をあやまちて　白図
まつりの具足着て走る見ゆ　我童
やゝ岸に手のひら程の雲起り　雪居
から網曳て腹あしきかな　我則
楼ににくや美人の打背き　是岩
はやりもて行平仲か哥　湖嵩
一時の跡もとゝめぬ二度の雪　道立
終には京に住へかりけり　羅城」（31ウ）

花咲て七日鶴見る梵かな　芭蕉翁
水行かたに春やみつらん　暁台
翻かへせ永和九年の唐ころも　蕪村
いとさゝやかに兮角の児　桃睡
しなひあふ小笹かもとの雫して　志好
田鼠わたる岡山の裾　百池
打湿る月の旦の雲丹の臭　呂丘
肩もあらはにやゝ寒の空　如瑟」（32オ）
提して酒を給はる角力とり　五雲
ひたりの大臣入おはします　春坡
うき中に当意の答目出たさよ　熊三
卯花垣にはさむ玉章　銀獅
雲の端の雨こほしゆく時鳥　湖陸
出舟をいそくならの商人　東窓
蝋燭の用意かしこき僕倶して　菅鳥
狐なくなる野路（露）のしの原　江艸
秋風に墨の袂の綻ひし　舞閣」（32ウ）

しはらくは花の上なる月夜かな　芭蕉翁
里しつまりてこゑすめる雉子　暁台
仮まくら琵琶の袋の暖かに　闌更

三四

天門冬を十はかり喰ふ　宗知
しら雪の吹れて消る古たゝみ　暮長
をり〳〵過る舟の燈火　素六（炎）
ふら〳〵と此三十日も出歩行て　不朽
目貫をせかむ人に逢たり　其成」（33オ）
謡屋は扇の辻子の角の家　五百斎
俵の米に文はさみやる　慮好
としの暮母の心を汲てしり　一茶
殿設して顔直すなり　李経
さゝ山へむかし模様の小袖売ル　蘭舟
一はいにはの露の朝夕　言道
月のかけ萩や薄にゆられつゝ　鉄翁
かさね馬曳秋の細道　亀渕
くろ〳〵と火を焼捨し跡見えて　亜渓
室のやしまに雨たまりける　字（子）湫」（33ウ）

花の陰謡に似たる旅寐かな　芭蕉翁
鳥飛に倦むゆふ暮の春　暁台
海苔焙る柴の火屑の乏しくて　几董
かりに敷たる莚四五畳　計之
余所国の講師むかへる麻袴　葛巾
ことは多かる人しかる也　野竹
いか栗のはちけて落る宵の月　巨洲
雨吹はれてみゆる稲妻　素考」（34オ）
簾してはた織窓に秋の声　元室
須磨遠からすなつかしき里　漁江
大きなる榎半はうつほなり　驢丹
御祓のあとの風のしつけさ　梅（杉）月
よき人の歩行より軽き藁草履　一帋
茶みせの軒に鶏のなく　蘭惠
から哥をとある襖に書添て　騏道
うしろめたさよ十六夜のかけ　夏雲（図）
そよきあふ荻や薄に泪懸　月居」（34ウ）

景清も花見の座には七兵衛　芭蕉翁
貝に扇の風情はる風　暁台
啼わたるこゑやおくれし雁ならん　蝶夢
橋普請する里の明ほの　甫尺
二三本松の下枝切すかし　泰夫
しらぬをとこの我まねくなり　良水
月の頃そこと定ぬ旅をして　瓦全
わすれかねたる其山の秋　素龍（然）」（35オ）
かつ散て中や乱るゝ紅葉川　渓夫
何を妹のものおもひ顔　柴蘭
はつしたりたてたり窓の破障子　髭風
空はてしなき雨の降やう　露莚
薮からの道は格別ちかきとや　雨竹
宗祇法師の跡を尋ねる　寿照
一杓の水に息する暑にて　周岱
莚ひろけて麦を干なり　尚下
曇る時はつきりと成昼の月　明止（五）
御幸の沙汰も近寄し秋　陳芝」（35ウ）
追付に早稲もかたふく樫木原　士朗
露そほおきて梅咲にけり　明挙

三五

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉翁
さかつき落すかけろふの前　一帋
山高し谺の中の呼子鳥　漁江
葛を割織わさしつかなり　暮雨
汲水のふたつならひし月の暮　帋
地上を削る野分一時　江」（36オ）
とり〳〵に院参つゝく萩盛　雨
眉は真白に西塔の僧　帋
はね橋の下行雲に小雨降　江
腐れし鮓を売そわつらふ　雨
寐せれハしつむかことき竹簀子　帋
正月三日既に過たり　江
国栖人は頭巾もらふて帰ぬる　雨
もみちか茶屋を花の入口　帋
颯（ツシカセ）にシハらく暗くなりにけり　江
とかくにきさむ陸尺のあし　雨」（36オ）
時は今月の武蔵野百万戸　帋
薄〳〵と売歩行なり　江
鬢の毛も吹れてかれん秋の風　雨
沖の火きえて浪しらみ寄　帋
莚なき家居しをるも世中よ　江
妻のかたこそ哥はよくよめ　雨
竹にさす日はしつけくも年暮て　帋
穂長雪ちる魂たれの上　江」（37オ）

こんにやくにけふハ売勝若菜かな　芭蕉翁
泥のかはかぬ昼前の春　暁台
蓬莱に聞はや伊勢の初たより　芭蕉翁
つと出てみれバ門ハなみ松　暁台
山里は万歳おそし梅の花　芭蕉翁
薮に門見る雪のむら消　暁台」（37ウ）
西行の庵もあらむ花の庭　芭蕉翁
草に手を置砂のかけろふ　暁台
四ツ五器のたかはぬ（ママ）花見心哉　芭蕉翁
松を身寄に風霞中　暁台
木曽の情雪や生ぬく春の草　芭蕉翁
鵜炬さくらのとても花なき　暁台」（38オ）

（注）

1　伊藤東吉氏「暁台年譜」（『暁台の研究』昭和51年）、服部徳次郎氏『稿本暮雨巷集』（さるみの会、昭和35年）、清水孝之氏『加藤暁台—研究・鑑賞・資料』（和泉書院、平成8年）らに関連の先行研究がみられる。概要については、山下一海氏の『俳文学大辞典』の項目参照。

2　「風羅念仏」への志向は、当時暁台が志向していた「からび」と関係が深いと思われる。拙稿「安永前期における暁台の伊勢行について—丈芝坊白居と逸漁の交流を通して」（『東海近世』20号、平成24年7月）参照。

3　藤田真一氏「暁台編『薦枕』翻刻」（『連歌俳諧研究』77、平成元年8月）

4　矢羽勝幸氏『増補改訂加舎白雄全集』（国文社、平成20年）等参照。

5　歌仙に連の名称が明記されている巻は、（　）に、それを記し、そうでな

い巻は暁台を除く脇か第三の俳人名のみ掲げることとする。

6　『尾三古俳書解題』（さるみの会編、昭和57年、一二一頁）等に詳しい解説もある。

7　満田達夫氏の労作「蕪村と暁台―その連句作法をめぐって」（『連歌俳諧研究』66、昭和59年1月）には、暁台の連句リスト（歌仙形式）が網羅的に掲げられる。『風羅念仏』の東武篇も俎上にあげられている中、G『上総・下総・安房篇』はとり上げられておらず、貴重な資料といえる。

8　『風羅念仏』「東武篇」の主な伝本に、天理本1［わ171－54の1］（A～F）、天理本2［わ171－54の2］（B～F）、藤園堂本［国文研リーダー番号・ト5－29－1－D01］（A、C、D、E、G）、洒竹文庫本（A～F）、早稲田大学図書館本［へ05 01897］（C～E）、早稲田大学図書館本［1739］（C～F）、富山県図書館中島文庫本［N91－21　5］（B）、河野信一記念館本［三七九　一二七八］（E）、某家［国文研・某家2・278］（F）などがある。藤園堂本（A）は首巻の無刊記本であるが初版であろうか。藤園堂本には、C・D・Eを一冊の中に含む無刊記本もある。

9　拙稿「加藤暁台の連句資料について」（『金城学院大学論集』人文科学編12－2、平成28年3月）等参照。

10　もちろん、芭蕉の一つの発句をもとに暁台の別の脇付けを複数試みている例もみえるため、芭蕉発句に対して、暁台の脇付けのバリエーション自体がいくつも用意されていたのであろう。

［付記］本稿は科学研究費の研究助成（基盤研究（C）課題番号17K02471）による成果の一部である。稿をあすにあたり種々ご教示くださった中野沙恵氏、冨田和子氏に深謝申し上げます。